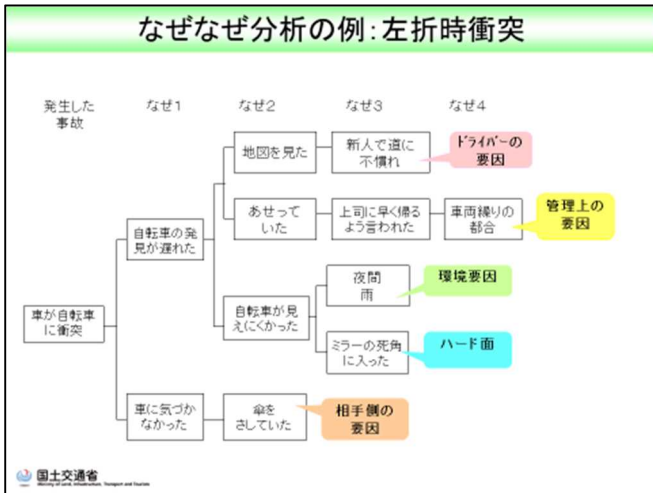


なぜなぜ分析による原因の究明
～各視点から幅広く「なぜ」を考えてみましょう～



前回お話しした「取り組むべき事象」を抽出したあとは、その原因（要因）を突き止めなければいけません。

「なぜなぜ分析」は、発生した事故に焦点を当て、その事故を発生させる原因を、順序を追って「なぜ」「なぜ」と考えることで、もれなくつかむ分析方法です。

「なぜなぜ分析」には、分析結果が比較的に見やすく、初めて分析に取り組む人でもわかりやすい、特定の原因を深く掘り下げて分析できる、考えた過程を図に残して、後で考え方の特徴等を検証できる（相手が悪いと考えるくせがある、等）といったメリットがあります。

逆に、1つの原因にとらわれすぎると、事故に影響した他の原因を見落とすおそれもありますので注意する必要があります。

このため、「なぜなぜ分析」をするときは、①ドライバーの要因、②管理上の要因、③環境面の要因、④ハード面の要因、⑤相手側の要因という各視点から幅広く「なぜ」を考える必要があります。

導き出された要因の中からその原因を見極め、ソフト面ではドライバーへの再教育、車両緑りの調整等が考えられ、車両の構造や機能（故障含む）などのハード面に事故の原因がある場合は、ドラレコ、バックモニターのようにドライバーの運転を助ける装置があれば防げた事故もあります。

なぜなぜ分析をするときの留意点

なぜ1

- ※分析の出発点だが、「なぜ1」を出すのに苦労することが多い。
- ※事故に直接つながる出来事
- ・操作の遅れ・間違い→(ブレーキ、ハンドル)の問題
- ・気づきの問題 →「相手に気づかない」、「気づくのが遅れた」であることが多い。

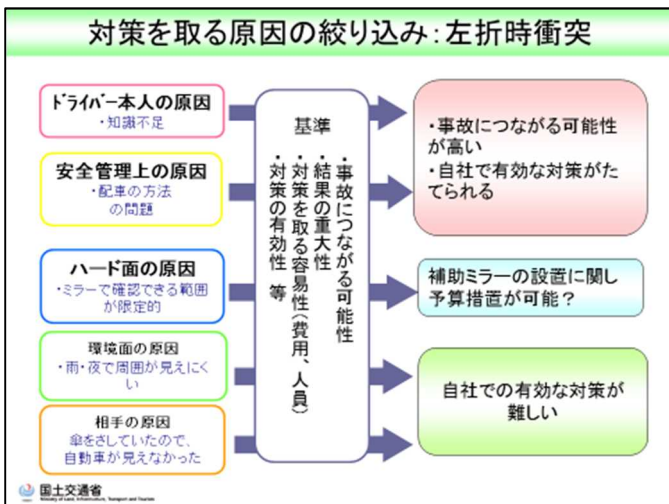
なぜ2以降

- ・分析の視点(5つの視点)
- ①ドライバー本人、②相手、③ハード、④周囲の環境、⑤安全管理
- ・自社で対策をたてるのが難しい事象 (相手の不注意、環境の問題等) → 深追いしない

最後にチェック

後ろの「なぜ」と前の「なぜ」が、「～だから」でつながるか？

対策を取る原因の絞り込み: 左折時衝突



周囲の環境等、自社で対策を立てることが難しい事象もありますが、例えば、柱、看板、植えこみ等により自転車が見えにくい場合等は、ハザードマップ等による危険箇所の周知、また、環境改善への働きかけとして、道路管理者への改善を求めることも出来ると思います。

「なぜなぜ分析」はうまくできているかどうかについては、後ろの「なぜ」と前の「なぜ」が「～だから」でつながっているかで確認します。つながっていれば、うまくできていると判断できます。

次ページには、さらに徹底的に原因を洗い出すために使用されている「特性要因図 (Fish Bone)」という分析方法もありますので、参考までに紹介致します。(分析の結果が魚の骨に似ていることで Fish Bone と命名されました)

「なぜなぜ分析」は、事故につながる原因を「なぜ・なぜ」と掘り下げることにより、最終的に、事故がおこった根本的な原因を明らかにしようという方法です。これに対し、「特性要因図」は最初にテーマ（検討する対象）を決め、それに関連する原因をテーマごとに整理する手法です。

テーマ（検討する対象）は、「なぜなぜ分析」同様、①ドライバーの原因、②相手側の原因、③ハード面の原因、④周囲の環境の原因、⑤管理上の原因を対象とするとよいでしょう。最初にテーマを設けることで、まんべんなく事故に関する原因を洗い出すことができます。

